

浪華使夫傳

卷三

特
遠
966
3



浪華俠夫傳卷之貳

本清



遠州佐夜中山麓 栗林真(印)鬼卯迹

中間庄云傍大道寺玄蕃次毒殺并根津

四郎大夫撲死之話

有妬友則賢友不親ひんあつたぬ まさたふげんひやうへ 且成我松谷軍之傍あつた 妬

石堂法大傍門撲死いしどうほふたへんもん 家老大道寺玄蕃いへらうだんどうせんぱん

をを 早速子息はやすみ 諸十郎しよじちやう 復かへ 誓言ちかひご の願ねがひ と雨次あめつぎ

首尾くびび よく御ご いふ女むすめ び多おほ 止とど まは若黨わかしやう 金子太かねこたい 云傍いへん 未ま 女むすめ 細こ 法ほふ

甲か 斐ひ 途と を見送みおく りり 終はつ 小娘こむすめ 夏子なつこ をを 婿むこ 迎むか へへ

よよ とと まま ちち 甲斐かひ 斐ひ 子こ くく 法ほふ 十郎じちやう 一ひと つつ 限かぎ とと

りり れれ をを 思おも ひひ 一ひと 沉ちか みみ かるかる もも びび てて なるなる 玄蕃けんぱん のの 氏うぢ 神かみ 氏うぢ 神かみ

遠門
跡 766
卷 3

信仰一々三日ハ系詰一々神主根津四郎大...
酒捧頂戴一々々此時節於文惡事災難...
ら以系詰一々々神主四郎大夫一子あり名城四郎大...
く當年廿五ありうらぐ萬夫不當の勇ありく去りて
公直少くありれを當く玄蕃が氣入る系詰の度
ま親子とも公易く終日物語あり帰るせう友又
谷軍兵湧う仲間庄兵傷ハ主人の頼とく玄蕃淡殺言と
せんとさぬく公城碎さ一が兼軍兵湧ハ預て一毒茶
城用んと八幡宮の拜殿も恐い入神酒の器への毒茶城へ
置るの羽人音一々色バト一や邊一と支出何回とも
く逃失りうらくとも去るば大道寺玄蕃ハいつもの如く

神前額突神主四郎大夫神酒取お修一玄蕃又とく免...
を頂戴一々神主一々へ取りまらうちや毒茶の枝り身心...
ぬまう苦痛絶ぐと死すうはあまの四郎大夫大とおは...
しくハ何事ぞと驚死早進乗ものよ昇のせ取りてく又...
途中あり空一々成りけるこの事おひく後進ありけ...
新比奈藤右衛門追とて刀めく途中まを馳ほさけ...
や中これたり藤右衛門を神主一々と熱さくの中...
ひうふ尋けつ又神酒頂戴あり拙宅まが御取あり...
あはれなりと聞いと扱々神酒より細やうんく神酒...
をも持帰へりりりかくと守へ右のおもむれうつ...
守よりと驚死く多し柱石の臣と大進寺あれを以の...
二



長門守の御殿



長門守の御殿

せ給ひ定て神主四郎右まは仕業なりし根津親子の者
召捕まへしと挿人数多き色々折ふし四郎右ま
ハ四五日他好ありとて四郎右ま一人召捕めり
役人と以隠く仰吟味ありとて四郎右ま一人
存せさしよりしりしけ不明なりしをさへく拷問
ありし教うち大進寺が長朝比奈友右衛門申出りハ
主人云蕃撲死の節神酒不審に存持席以此神酒四郎右ま
自分毒か入置りし給り間殺りし御吟味ありしりし
中おられし事の事と思召四郎右ま召出さし右の神酒吾
るに中仰ありしを四郎右ま護りし此神酒私におありし
不審に存し何卒給り度旨り上りし神酒とありし

四郎右ま小あへ給へし此頃より毒氣酒中ニ満くと
思ふかありしとありしと昂時ニ七顛八倒して死りしを
不思議なれ是れ四郎右ま毒殺せざる事ハ分りしれ
るも誰が業といふ事汝より四良右衛門日と経く父の
と以事汝聞出りしけ度しと最早明日父ハたの神酒と君
お昇りと聞くより大に驚さるふとも此神酒ニ毒入し者
ありし何れも手かやありしと於又神前汝より小時
画印筆式重あて扱を敵の手かや汝得りしと懐中し
何國汝當りしあはれども足し任せく出たりし玄蕃
男子ありしと暫く大守に知行預り給ひ朝比奈藤右衛門
方娘夏子汝に預かると暫し町家の住居仰付られし夏

子と法十郎思ひ暮らさうらましく父の玄蕃撲死ふ公と痛先
 うつくくと娘ふくれと奥ごと控も公坊若の給ひ友右衛門法とも
 うましくいとらう介抱し給へとも只相思ひ小控もよう保ん長人
 友右衛門控の辺に立ちあふ云甲斐友あさけいよとの外姫君ふ
 る渡りせ給へとも大道寺家のゆ子やうふとて法十郎殿の在衣
 とも尋侍の男君の敵とも討父君と毒殺せしも伏とも尋
 出し敵とも討給ひ供養ふ侍へ給はん御心もなく只うつく
 と歎伏給ふぞやと毎と諸ともいさ先給へば夏子むつと
 と起らう今ハ何とら包とひえん我もとくより父と舅の敵
 成討せんと思へども母若のうらはし何國へも立返りんと申
 ふハ歎給へん友右衛門も女一人ハ何地へもやらずと思へ

ひねりて母と友右衛門つら可存あはば早速夫法十郎殿
 の御衆を尋ねり逢父との敵舅君の敵と討て立返らんぞ
 勢ひ込んと宣へば藤右衛門も母とを胆驚且恨たやうの御公
 ふらう一先大坂表へ立越るふべし法十郎殿も大坂へ落付るふ
 う風の使又御傳へ侍我侍友右衛門家中の懸くと口論はじ
 手癖と負せられたる又者の癖は憚り勘當はり只今あその大坂まで
 朝比奈藤右衛門中人よまうとて者のお傳へ兼る是へ落付るは
 法十郎との、お衆は尋ねるふべし供へ仲間友介譜代同家の若
 むれを大坂迄送らせ給へとも母君の御事ハ此老人の預められ
 此氣まひあそらうと詞涼しくいひくまを母君ハ病れ速のと先
 ぬい宣へとも今又若く女一人をうくと申人事終いくゆ

思へ多へとも夜ち傷門が 謙小是此かく旅の調度さう賄ひて
仲間友介一人は供あそく大坂へのかーりよは公のうらねり
うきと哀さうり事とともなる

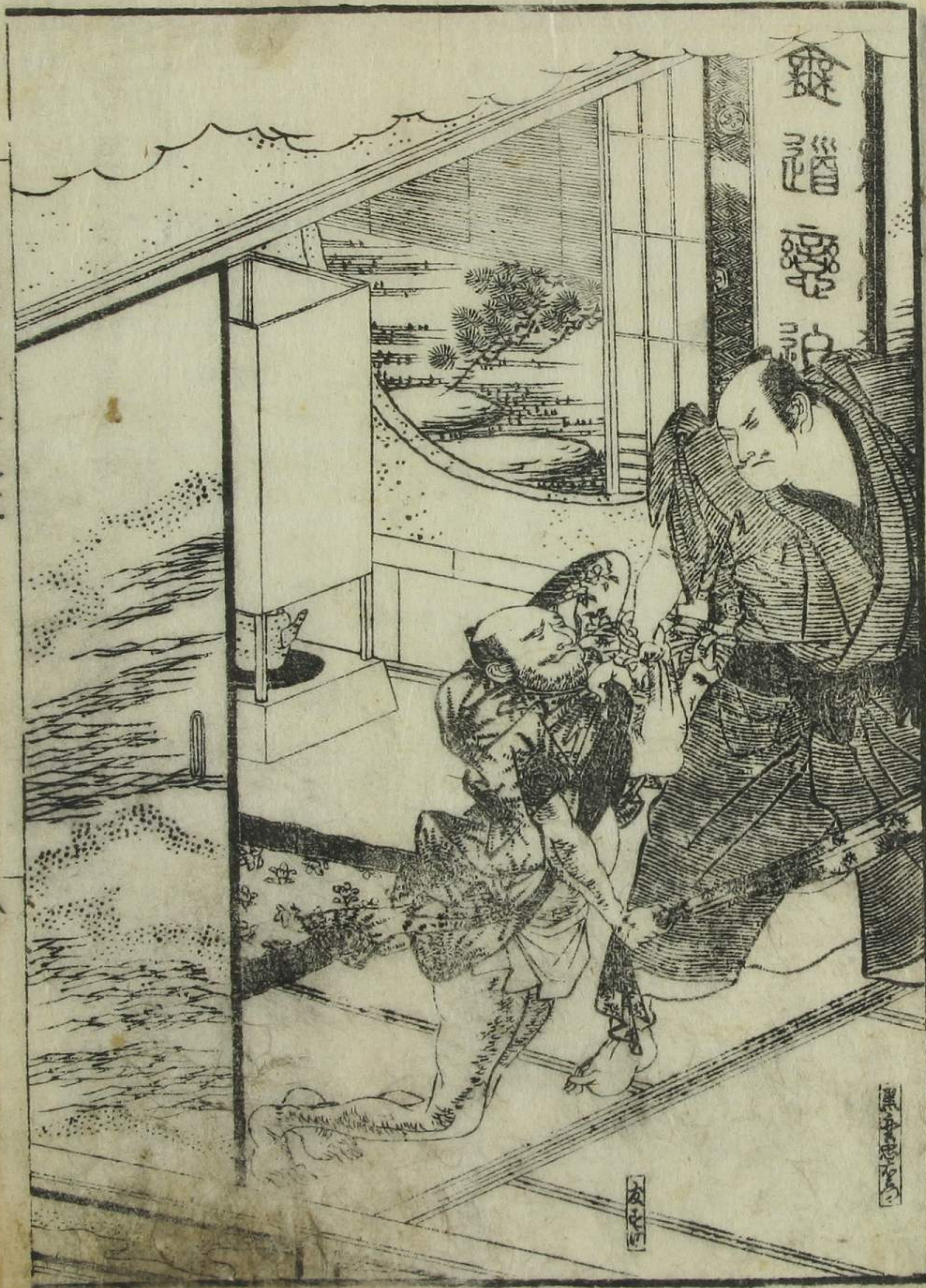
黒船忠右衛門が傳弄夏子危難の話

先年舟越良介が代々刑に召さるる一九郎船忠左衛門が由緒
以委しく召さるる尾形三郎五代の孫尾形の九郎とりかものあう
しう此人河辺よ住る船の工夫をさうり風は随い浪は逆らぬ
の工夫とく便利なる此船は九郎船と名号さうり此船黒
く塗さうりこれをいつり黒船と号たり夫より黒船はゆつ
名字とい庄官忠左衛門は子孫ありしが彼一乱の時よは將忠を

長崎ふありと横子城を次を唄さうり船越良介父は代つて
死に候はしは色しうりちりぬえよ致さ我死ぶと命は良介
代り何面目よ諸人ふ面と合さん良介の妻子とてもあう
さうを恩致報せ人事を叶はぬ詮此可あうさう男子の事
アハあうまうと父ふ賤を乞大坂さうり急ささうり是は叔父
道寺の息女夏子ハ是後取支介と召さ夫は十布み逢人
と加草よさうりの旅路を中く備後の鞆といふ交さうり
来り船待しとねりさうり友介初の程ハまあ中りよ仕へ
く親が夏子の容色よ公うつり何卒とて一夜の契つて旅頼
さんと船待よは送さうりおしよとてハ情致通みどれども
夏子ハ大ふ耻し免さうりかアさうりやとよあやめくよ思ひ

とくはくれば或夜密に夏子殿を忍び候と申くは説き及ば
 夏子大いに怒り扱ひ己におよばしや主人も不義
 云ひをりあや奇怪なれ今一言いりてさりと懐
 發拔る事あり実ん勢小友介嘲笑ひ主人の娘は不義
 性根城定比の云出さんや懐銀り忍一とて中み見
 や前全両腕くくしてありとも幸を遂んと忍くつと
 紅く押へ後手縛りよれハ夏子呼んで畜生めといひ
 旬生とも宿をあれハ外よい奇人ともあはれ
 友介あたる良小碓は奸淫せんとする刑隣の襖さとい
 さして立出ろ人といれを面枕花の如く眉とく唇朱の如く服
 中夾く脊の高さ五尺八寸横射を延く友介と五六回投の

け夏子の縄をとたおろくといたる有さぬよ友介大いに怒
 りふくさ素丁雅め何やつあはれ此方の座敷へ埋不表小陥
 込く狼藉の振舞もろいと詭くは此男大いに笑ひ狼藉
 とい其方の事なる主人娘は不義といふ事無舞の振舞え
 ろよ忍びを隣りの座敷ふありつるが見悪くも侍あり其
 元も公女改り大切奉公あは娘は其某一詭くははりえ
 と事と分る言聞とれとも友介ハ狂文大に怒り汝一何者
 あれば我と投付其上よ舞詞堪忍なりとて手ごめみせ
 しとら娘はとてもいりて其まに置とんや刑詮娘を何方も
 連く立退たり邪広とる事ふりし又夏子も飛くは
 此男大の眼と見聞きかの色隠く事と分る言聞とて無侍小



金 踏 躰

漢子忠堂

五



浪花伝卷之四

七

六

娘を連ねんとて人非人我に未聞不見の者おれども見らば
びと挨拶とて最早此方より望み簡なりけり一と大の男と大
の子と投たる如く座敷の前敷へ連ね堀のあふとへ手はうを投出
とやうに投中りりり立帰つて夏子よつておれ身はいりありけり
とて何圃へ向ていりありけりや夏子泣く礼謝して自ハ豊後
の圃圃の家老大道寺玄吉番う娘夏子と申者ぬりやうくの子細古
里と圃と立退しは家来が無射の哀慕も命も危く候へり一は情ぬ
りりり再びおれへ候へり君はいりあり候方ぞやと尋ねば此者大
驚と扱へ大道寺の娘とあり候ふや某と伺圃日田とて所領分
住黒船の忠右衛門と申者也先達候父大道寺君の恩沢と蒙り
し親忠を湯門物語あり候るがごとく此娘は助をせし事

不思議さよ我も大坂へ登り身おきバ御供申其朝比奈の夜を清法
候子姐を引渡し申へり申へり安く候と夫より使船と侍りけ夏子
とておれい大坂候りて登りりり

金子左兵衛再ひ古々へ帰里強盗小逢ふ話

石堂清十郎金子左兵衛は首尾よく殿の御殿後より大坂へ登
りておれとて敵救谷軍兵衛城におり候と夫よりいふ手かきおれ
候が傳手とておれ清十郎と大松とて呉服屋へお代なるおれ
置りおれこれハ諸人の入込おれおれとて城をとおれおれ
なんとの謀りりり其身ハ其頂浪花と海にせり使客の商賣と
かりりり救谷軍兵衛と長門國へ恩を志のい任びりりり

聞く先清十郎よ去の合せたま清一人長州とさして下里ける
 其頃藝州嚴嵩明神の祭礼なれど此人集り救谷と見出さん
 事とつりかんと心ぐ中交者の旅籠屋を佐伯婆とて恐
 欲人のうて悪事成のそ一金銀と夥貯其身ハ旅籠屋高
 かり暮り々程り大坂者宮罵市より救谷の高ハ物と仕入此佐
 伯婆う九は旅宿一と強うさうりゆちたま清も暫逗留り一ち教
 或夜丑満の頃呼子の笛笛は聞へ盗賊も入来り中も首領声
 とりけ旅客の金銀荷物とる事なれと先亭主佐伯婆を
 高手小手よいぬ一先案内とて金のあり取城せ先向り教この
 時たま清ハととれ男なれを早くも聞付盗賊ハ人なとて服
 指引をは免待り々盗賊の首領と覺一さ者ハ匿子の踏込り

黒羅紗の羽織を著一同一に境以巾袋まぶらる著かり一根指の
 大小と差一悠くと入来る取候待まふ多ふた兵清出此家
 小鐘のたま清とよ去者泊り合さくあうと去ぬ盗賊も命は飽
 一やいさう成りて此世の暇さう一呉んと切りくれと救谷の手下共
 抜つとて我方と一と切結小る兵清が手煉のたま刀先よけふ産くも
 あつとまばらまらくとと逃去り彼の首領中一と男の振舞ひ
 あぬりけふ事の傷ふ某相手とつと得させんとつ甲後控彼の根指
 の三尺二寸れり物と抜かど一何後羅王の如く躍りくれたま清
 も完ふと打笑ひ盗賊も似合ぬ廣言某う又よかつと槍の産
 越ぐとと両方火をぬとあつと戦いりらたま清声とけ暫く
 まつり事あうと又とつれと首領も暫息と終さよらり時



ちを流すといふ其方が只城前よりつくくと見ると先年
 の刑は流すれ一船越良介又寸分遠き一我折ふ一空へ
 穀色能見えたり寂かな似たりと斗思ひ一斗戦ふうらよんれと
 んらんと遠ひたり一正しく刑ふれ一者の生ぶくくあり
 つこ中より一我是よよつと惑ひく戦ふよ思ひび汝が身のよつ
 まはあり一我疑念を晴して後快く務負せよと叫ぶれ此者
 も大ふ馬一又よつとくく宮ふひいうる人を我ハ石堂流す
 う家来金子を流すといふものあり一聞より此者両刀投出し誓
 侍給へ中事ありとありとつとめれを佐伯徳一人縛りよこ
 とありちれを盗みぬ一金銀と手下小持せ我ハ返り帰る
 産し不残を帰るべしといひ渡り立ぬせ佐伯波切が首

とたぬら打落し扱ち兵流し向ひ足下の空ふめく我ハ船越良介
 らくくの次第よつと其元の沖を人傳を流し助し進まよつと周
 防の山口乃奥し身とせり中り此業ハあせとも此道の金銭と
 らば此家の波勢く如き此義非道哉と貯へ一財を奪ふく會
 人は施し傳り清た流し戻の沖恩ハ行時も忘さど何卒御恩と
 報しよんや明暮思ひくせとも日後の身なりを公解し任せ
 足下ハ國と難しとくかろ則し漂白しゆふを不審しとせし
 尋ねれをち兵流涙とらつと溢し主人清た流し戻の沖
 くの意恨よつと松谷軍兵流しよ者よ討しよ入沖子息流し
 市屋飛迫其仇と移しんとよぬく心破れも今よ有折し其心
 と聞より大よ仰天しと扱はさ中りよつとありけり沖主戻の沖心

浪花伝巻之貳

中察一やうう海山より深き御恩を報しきり後残念去ら
 ぐ我も是より暫く盗賊乃業とやめ清十布衣其汗の力
 とありくは不救谷の有家体易りまんまうらさ山口乃山奥
 住む志の首領より紫築撥六連無双の英雄なり足下と
 も伴ひ我暇とをひく御両処の御力おかりりさんと世は
 く空々きむを兵衛大ひは恨ひ左ありとこい至深う大幸此
 おく我より我も其控六の對面し敵の手かりともあり
 我並んと兩人打連りの山奥へまけ入り

朝比奈藤兵衛傳并清十郎逢難誌

浪花名なる使客あり朝比奈友兵衛といふ元ハ豊後の國

のこのよりく則大道寺が長朝比奈友兵衛門息く生得大獲
 廣量生涯ふ誤るといふ事と云は先年人ハ疵付く父の不與と
 家ヲ浪花へ出く使客とあり人ハ是誤り道來大道寺家乃
 強動旅の御くつとも遠方ありふは任せ如何と案し
 尋りけ於小或日案内し來る者あり一婦人と伴ひ來り
 人品只者よありびと出向は彼も執首して我ハ黒船忠たら
 といふ者ころやうくの事よく此婦人旅伴ひありしを委細ハ
 婦人小圃よりくつちねの夏子ハ幼女こそ別き一後兵衛友
 面ざしんあづびとくども父友右衛門が文と出し母上の言傳
 具さすも語るも涙先をりねの友兵衛大に驚く想はれ
 少く別きとありせし姫うくやいりや去るこも黒船

の御厚志感入仕るいりも清十希辰波未見逢せし
せんといふ安くも申合叔忠右衛門殿も此知よ住居
此娘の身の上共々頼まのり身おせうか
兵衛足赤分とありて御世話さんとうあくひんれ
忠右衛門も大ぬ収ひ我も難波又住居せん志
知音迎もあつげ公うく思ひし御深切の言
何分幾く頼まのり夫うう辰波方
堂嶋仲仕頭の株取先辰波分とありて
衆も勝きたる友仲間一統帰伏し頭くとも
夏子の月清十希辰うう家とそよ
の事あまぬ逢ぶるもあつげ思ひは
大

を起し自ら國伴の氏神ハ八幡宮
備宮より糸糸して夫乃行末林
け敷或日ゆるり大松屋の門と見入
清十希ふよく似たりと目と定見
ハ八幡宮の御利生なりんと店
はさばやと声とまは清十希も
ありりまはこいりよとあま
るるくの海山波越て此地
ハ泣くあましと語り今ハ朝比奈
ふたれは爰ハ店先あれはハ

のくと縁しそ別まらるまらり法十布ハ朝比奈夜を湯が
 方へ来り歌と見んと先は金子を湯に再ハ圓へまらり
 是ハ何分夜を湯成力頼むぞと夏子とこりあさ中と
 ろうよらる愛よ又法十布ダ身のとよあやと災難を出
 まりりらあ日大松屋の店へ左流あり士若黨二人書は
 後後箱よく入来り此ふ且恥の娘君婚礼は付夫への死下物
 ありと夜又法十布は渡しけんは九百兩余の長服なりりれを
 法十布大ひは収色く馳走しそ後後十巻辰子廿巻其外夫と
 並付しそ右の巻物後箱より紙水引体出させ森しそ包
 して書役よ上虫塚させ不残後箱へ納先金子百お取出し
 渡しりれハ改請取則請取と相渡し門口へ出たり取ハ圓えり

早飛脚として大松屋門口より出會右の侍何事か申見よハ圓え
 少く賀君即逝去付右の進物相止し申との事ありと虫塚を
 相渡しりれハ侍大は驚又店へ立帰し法十布は向ハ只今
 圓く通りの時宣を右の巻物返却しそハあり右は付てハ金子
 返ん下されし申しと金子三百疋差出し是ハ先刻より馳走は成
 以謝礼なりと差出しりれハ法十布其外の手代とも拜退しけ
 せとと圓入び差並右の上包の水引の俵差戻し金子請取立帰
 り於夫より法十布右の巻物悉くわと見えハ不残奉むりそ
 只服抱ハ一つとあはれハと大におどろきりれとせん
 こととさやあり法十布が掛りの事なりれを引負同前なりと
 て諸人方へ預らるり教しそ是夜なくさるなり



夏子賣身救清十郎話

此事朝比奈太左衛門夏子諸とも聞といへとも大金を証方あり
 殊に鐘のたき清も西國よりくくごまば談さるる人とそくもあり
 以心を痛めりも夏子さぬくと思業して救え清よひひらるは清十郎
 敵の身ハ大望の事ふきばかり捕らるるも同前の身の上さくはいさ
 敵のつらさを尋りよへとも何とぞいふといふの事さるるもさるる
 右の金銭價の身のまかり給ふれと決あう頼りまば救え清も口惜
 と思ひなうといふ人もさるる手ぬなく新町の備前及くつる置屋ハ
 兼く知喜あれば夏子伴ひ立赴右の事ハ決然とれれば分量といひ
 云々といひ気色位は救へ百両金銭渡りければ救え清夏子ハあくく
 ありき清此金といひ清十郎引員と償ひ連帰りければ清十郎と

夏志とのノド後小くさるる丈ハ救え清よくはれりも夏子ハ
 滝川名張改道さうら小新造よおさんと取らう紙と出りれば
 滝川ハ評判廓中不聞くつと出の目付待々さるるの大守ハ用
 達を勤し鐘倉屋仁右衛門といふものあり昨五郎八郎徳実の君
 子ありらるるが大道寺石堂兩家ハ折着國へ下りし節懇意なり
 りらるるもて大道寺ハ深き思ありあれを此度清十郎が救ひの
 こも夏子さるる助せよといふとと聞いふもといふ雅儀と救ひの
 ハ思とも都屋住の身あれを心よ任せ候くくく終つ滝川
 身のよ多くの人よ救えとせんとせんものといふはさるるの目
 より客とさるる外の客よ逢せよ表向ハ滝川と源の中くくんば内証
 清十郎と呼よ逢せらるる心の四情ありらる事あり其頃ハ所く

俠客黨と立浪花と疾組ともあつたが茶釜組とて十人
 黨致立其頭てふものハ先年大道寺を毒殺せし抜谷草履取
 庄を流かりし人の取らぬとて獄門の庄を流しぎ名つらた此組
 者ともハ喧嘩と事とせ人の懐中などの物とさうくつらた其頃疫神の
 如く恐れつら頃ハ二月の晦日の夜蘆倉屋五郎ハ彼を守り
 百両の爲替手形と請取何心なく藏中をさう帰る道あり茶釜組の者
 こもらんぐらよるよ打擲して懐中ののめと不残取追放し
 五郎ハ無念と思へどもせんなく瀧川が方よまう右の事ども詰
 り心よ瀧川も大恩の五郎ハあま色くと心を痛め幸黒船の忠
 右流門来つらあつら右の事と物詰りれば忠右流門に心易く
 詰合五郎ハ流門の執断格の辺りつら庄を流を待文何の苦も

打伏し懐中の紙入と取戻し五郎ハ改めさすく金子と
 女も流夫せしつらども手形ハ無お遠あつら流門持つてつら瀧川も
 流十郎も其座よりつら忠右流門が怪力と威し五郎ハ紙入
 と改免つら目あれ紙入二毛あつらつら是れ我ものよあつら
 と打くし詠めれば流十郎目子く見つら此紙入抜谷軍
 云流が所持の印籠ふとも似つらつら同一時繪もあるもの
 流れをうつら詮義もあるつら二重不足せし事も不
 審し五郎ハ瀧川もあつらつら忠右流門心と付て何
 き此印籠我れ提り歩む人をもつらとさるる詮義
 ぐ故のあり家を尋ねん我れつら終りれつら紙入詰夫より
 二重の印籠と腰に提り

良し入



東上巴人三景



浪花倭夫傳卷之貳

十九

ちとけつ 姫討より起つ事ありはや我ハ牌四命右希今テの名
 ハ根津四命右傍門必常ノ勝負せよと除かきゆく切く
 忠右傍門脇差投ゆ一ツツ全くと面ひせぬとつ事
 ありと押寄り我ハ其大道寺家白練の者なり我志の敵なきは
 詮義の手あやと忍出さん善み懸くも一也と聞及ひ
 根津は希右傍門とのやうなり此下亀のいとも手かきつ事途中
 しく傍へつば我方へまぶしつ取つるの向はまぶしん
 五希右傍門忽然と出先くううお人のあつるおぢぶらう
 一聞申さう我ハらんや希右傍門の遊人のあつたる男なりい
 全く忠右傍門みくハ何ぞか彼お人の骨がうまう大丈夫と見
 文ふれを我方へ伴ひ見分おの固且右亀の役も我くふく聞

必聊尔あえうばとお人とちどお伴ひて我任家へ帰アタス

両雄獄門庄共衛取進を語

かうく 咄 立島右傍門ハ黒松忠右傍門根津四命右傍門
 人と伴ひ我家へ帰り忠右傍門み下亀の由来談きり獄門の
 庄兵衛といふ者の手よ重手み入し如清十郎此下亀ハ枚谷軍兵
 衛が所持せし下我に似たりとあやと此下亀くく敵の被さ手く
 と思ひ二重を不取提しおとつ次も四希右傍門不見さめと希細と聞
 けり枚谷が所持お還あはし此ハ兩人の縁入也獄門の庄兵衛と
 挿くせんぎせが分一乃手ぐりたる人と語りぬれを四希右傍門も忠
 藩の討敵あふほひ五右傍門三人見分おの益をまじ庄兵衛を

ヨる出し久し味せし 詭しを致庄を信の忠を學つは紙入をそりしふと
諺り由りては歩かおも手下敷るる石連性ましとく史愈く折悪く
友人空しく一月多くとく一もが或夜を其橋とよみまをりし二人庄
を隔ふ人會ちれをての何くと黒船の忠を信の忠を信の忠を信の忠を
ふし不来るつんと侍とも音もせられを此方より尋あつたさくそりて
其首の意恨あふし仕入しせし信くれを庄を信の忠を信の忠を信の忠を
さあぬ船まて大坂は居るやうそ黒船の忠を信の忠を信の忠を信の忠を
入六捨別仕入しあはさるは奥の庄を信の忠を信の忠を信の忠を信の忠を
も汲んとくせあは心くあはれく意恨なくと言捨く移過るを
忠を信の忠を信の忠を信の忠を信の忠を信の忠を信の忠を信の忠を
の中は此方不覺へたれものあるゆ返さんと居し不徒折つ出入會

たりと世の予義成さく出せば手は取らく不慮し此予義ハ二重あり
あぐりて四重みちりしは是れ此方みあらはと授うそは根津の市界
右脇の部も物も其二重ハ豊後の國岡の城を八幡宮の神前小毒本
を八捨別しは人其忠を信の忠を信の忠を信の忠を信の忠を信の忠を
引板く切くかむは手下げものた何ども抜つて切くかれをくとも
せは友人の英雄まをせんと切くは信くも似は手下の目ももの
飾をも見れしと逃らるるり庄を信の忠を信の忠を信の忠を信の忠を
ゆと友人橋の馬中し押信取つて押中も何れも信の忠を信の忠を
何者それ神酒は毒を入る番とのと毒殺せしごとく
伏せ命斗の助人と兩人刀と鉈先へしつそれ庄を信の忠を信の忠を
清待り人白状しるる人それいりお答軍兵信が仲信庄を信の

浦上俊夫傳



源平物語卷之八

又者やうり主人軍さ清遠なるを退時分我の金子とわく何車八
 幡宮の神酒と毒以入置大道寺玄蕃城叙一兵也よや頼よよの神
 前へ志のび入毒茶と神酒入置一が心せく保平能二重志也置一が天合
 のれど西人の衆も見あつたさしたく此上を命助助け人といひんさば西
 人詞とそ後入此上は軍を清が有家城包は白伏せが助言といひよ本
 主人の有家我能あをゆる暫く安をさる先給申聞うさんとあふ又
 して四帝なる庄を清と引起しつと白伏せといひらう中樞のよらう川重
 飛込んたり相謀つと一と西人大お怒うれを暫く川下へ浮さう黒
 船根津の大馬鹿との我謀不落をせとて夫もさうりと涼むべし
 と云捨く又水甲へ入らう相く残念を極なりといふさんと暫く保
 たりとせ金ころあけ色バ打連くすを帰るを教

船越良介鐘の大兵清大坂出兵救谷軍兵清出世の話

此時築紫權六方お居らう一船越良介鐘のを清大坂の役りととの
 のふさくは清す即足難お逢らうと風張あををを清首領の暇とを
 くお出んとそれを良介を一つとあけを思の清なる子息あれを我
 こも暫く大坂へお越及びたが力を添んと権六又願ひそれを権六も感心
 誠義心ある西人といく此所おる先並人早速大坂へお越供く力と
 成りへべしと柳と権ひて別色け色ば友人山口の奥よりお出く足お
 て上りささしてのわらうらう通なく上坂しそれを朝比奈殿を清を
 清十郎おも逢くわらう合お夏と勤意をふきりし事と聞くと西人
 大は驚きさそれともいんともさる事なく先殿を清くお這へる
 うちよ忠ちう四郎ちうも来てうけと忠ちう良介と見くと

仰てんまき 其末姑坊あつる小治あつるの情あつて助り志とく周防の
 山奥小居とて志事誠語うあれを黒船ち小収ひ其えの事ハ
 我親子の命の親あるを今より兄弟のちあつてなりぬれと
 夫より忠あつちこそ清四あつ良介夜を清兄才名の不直とあり
 是又不思議の良介の面顔忠あつ小寸分遠は其の兄弟といふも
 是など少似えうびと人言あつ其あ修浪花の武家つた
 船越良介が男ぶうの立流あつふよう流士なふ百かへ給ひ々
 幸の事ありとて名と船越十をり改先流士役とて勤めたり
 それおあつが身の代成つるあひ身まふせんると明暮五人四
 くととも金の事ハ使客のなるも及は日日夜送つちあつ愛小
 又松谷軍を清ハ國城を退京都下あつ人あれば其方小く色世

のさぬ幾何ひけり小瀬倉の執持小三浦の前司泰村とけり人の子息ふ
 三浦の荒五郎といふ大名あつける在京のつとく堀原のち丈田毎と
 つる妓婦小澤く別深あ小雄と取中とわうらるよう軍を清は事と
 同出我世といづ時節至来なると收ひうの田毎ち夫よ妹女帝よ
 あもかうひ金銀とまひられをりう田毎も懇まふあねまは徳お
 うちやうと荒五帝あつるも通付とわう内波の世話とまいうりれむ此
 若殿軍を清攻世あつるものと思われらるあつるよ在京の任果て帰
 國の沙をわうらねば田毎が思ひ荒五帝殿も何とせ身文とて國
 へ召連人と思われちれとも國の人口を思ひ悪く懇まの軍を清
 あれば事相談せしむらる軍を清と心よく文合幸我小梅津の
 中將との懇意あれを田毎ち夫と受出梅津の中むとの姉妹

君とあり我ハ姫君の内附人とありて御園へ参りなすいさうの事
 ありとも某宣しう云ハ親殿の御早入ア候しと手取中しよ
 言われを荒五郎殿大いよ返ひえうが某在京のうら又其元梅津
 家の使者とあり親前司へ縁談の事言入候れとわしを早
 急知し家来救多石と鎌倉へ至り梅津中將の使者牛尾左膳と
 名乗婚姻の取結ひありと此使者の趣をのべれを元來こころ殿
 外よりより親族家もあつと此ハ公家の縁者よりありし事ハこそ
 あこそ本をゆゑんと早急某知の返答あり京都君殿の家老ハ右の返
 仰せをいさふれば梅津家へ送納取揃へ御受納ありと送る鎌倉へ参り
 大殿候ひ大うごふに姫君の御奥入とぞ急がれんが

浪花俠夫傳卷之貳尾

